

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第43巻第1号 二〇〇七年八月

《翻 訳》

アルフレート・デーブリーン著・岸本雅之訳

## 『ポーランド旅行』「ウツジ」

随所に物質主義が見受けられる。これは空虚なものだが、そこには未来が予示されている。だから、私は物質主義に対する声高な批判が好きではない。

クラクフ南方にある岩塩坑<sup>ヴィエリチカ</sup>に立ち寄る。舞踏会用広間<sup>クニグンデ</sup>、ピウスツキ広間といった巨大な広間。いくつもの礼拝堂にはガイドがいて、期待してはいなかったが、実際はもつとひどかった。全部塩でできていて、それに感心せよというのだ。たとえそれがコンクリートや砂糖菓子で作られていたとしても、私には同じことだ。坑道では岩塩を間近に見ることができたが、ガイドたちはランタンをもって素早くそこを通り過ぎて、電気照明の効果で私を驚かそうとした。私は内心、退屈が大あくびだった。最下層には鍛冶場があって、モーターがうなり、赤々と火が燃え、金敷があり、生きた馬がいた。少し離れたところには塩坑施設の立坑があった。これらのものを、そして労働者をこそ私は見たかった。しかし、ヘーツリストンの私は家畜のように追い立てられた。彼らはさらにばかでない広間やら何やらを見せる気であったのだ。

ウッジの舗道を歩く。家々、商店、市場を見ていると、しっくりとした心持ちになってくる。私はザコパネに行き、山々を見て、その上を冬がおおうのを見た。ザコパネの家はまだ私の背後で消え去ってはいない。私は彼女たちとともに暖をとり、喜びをとにした。まるで、家族のお祝い事に加わって、平日にもまた彼女たちに出会うような心持ちでいる。今は、いつものように異国人として家々の前を彷徨っているが、私は彼女たちの部屋に迎え入れられたのだ。

さて、目を上げると、厚化粧をした女性たちの表情、眼差し、明色の靴下につつまれた脚——、黒いカフタンにキツパをかぶり、髻を生やしたユダヤ人の男たち。崩れかけた家々。ここはロシア領ポーランドだったところで、ワルシャワと変わらない。私は再会を喜ぶ。私は彼らが皆好きだ。このロシア的混合を、ガリツィアの街よりもずっと愛している。ガリツィアの街はあまりに洗練されていて西欧的すぎた。

一本の通りが南北に、街全体を貫いている。こんな通りは他のどこの都市でも見たことがない。ペトリカウ通り

という。そして、この通りで、婦人装身具店やレストラン、紳士用既製服の大売出しにまじって、ひとつのドイツ語の看板が眼に入る。ウツジ・ドイツ語新聞。つまり、ここでは他の都市でよりもしっかりと案内してもらえるわけだ。ローカルニュースや広告など、現地の新聞を自分で読んでみよう。

そういうわけで、レストランに陣取り、新聞を読む。「牛乳は加熱してから飲むように」と記事の中で太字で警告されている。おや、どうしてだろう。これは何かあるぞ。噂が広まっているのだろうか。恐る恐る市の下水施設に目をむける。そのようなものがあるとしてのことだが。見よ、ロシア的不潔にも短所があるのだ。ある論説が制癌剤ゲデュロールについて伝えている。「先ごろ発表された新しい制癌剤開発の報告は、またしても、読者が癌問題のあらゆる動向に目を光らせていることを証明した。」ここで引つ掛かってしまった。どうもよく理解できない。ポーランドでは特別な因果律が支配しているというのだろうか。この報告が、読者が目を光らせていることから生じたとは考えられない。あるいは、報告が注意深い目から生じたとして、どのようにして入り込んだのだろうか。ひよつとしてこの報告自身が目にできた癌腫なのだろうか。だったらゲデュロールを使えばよい。落ち着かないままに、別のところに眼を転じる。「議会は失業中の頭脳労働者対策費として二〇万ズウォティを可決した」との電信が伝えられている。これはこれで結構なことだ。国内に職のない頭脳労働者が二万人しかいないとして、一人頭一〇ズウォティになる。すると彼はすぐさま、一〇ズウォティで何をしたらよいのか思案することに頭脳を使える。議会は五ズウォティ、いや一ズウォティでも同様の効果を達成できただろうに。なんとも気前のよいことだ。それから、「土曜日に、ルーテル派婦人会が驚愕の大バザーを開催する。」食肉協会がウツジ自警消防隊ホールにおいて隊旗授与式をとりおこなう。ヘクラフトン体操協会がダビデ王の故事にならない「優勝祝賀舞踏会」を催す。ウツジ。この市では明らかに、人間よりも工場のほうが急速に発達している。ずっと前から、私は、有機的世

界よりもいわゆる無機的世界において、よりダイナミックな運動が支配していると考えている。有機的なものは、遺伝という口実の元に、その悪習を増殖し、ありとあらゆる種の維持と安定がすべてに優先している。だが、無機的なものにおいては、電光の一閃によってすべてが破壊され、すさまじい混沌状態が生じる。新しい生命を繁栄させるために、まず没落を待つような必要はないのだ。

シエプティツキとストプチンスキの決闘にざっと眼を通す。名状しがたい事件だ。保健統計が目につく。

「一九二三年のウッジ統計年報には、近年における市立疥癬治療院の活動に関して注目すべき数字が見られる。当病院の治療を必要とした患者数は、一九一八年には一万二千八百五人、一九一九年には一万一千三百三十七人、一九二〇年には八千二百八十三人、一九二一年には五千二百三人、一九二二年には四千三百三十七人、一九二三年には千四百九人となっている。こうして比べると明らかのように、戦時中ウッジに蔓延していた疥癬は一九一八年以降、しだいに減少しつつある。疥癬は一般にキリスト教徒住民よりも、ユダヤ人住民の間でより広範に蔓延したことが認められる。このことは、ユダヤ人住民の衛生事情に多くの課題が残されていることを示している。とにもかくにも、一九一八年における疥癬罹患者のうち五七パーセントがユダヤ人であり、一九一九年に市立疥癬治療院で治療を受けた者のうちの五一パーセント、一九二〇年では六二パーセント、一九二二年では六七パーセント、一九二二年では四六パーセント、そして一九二三年では八二パーセントがユダヤ人住民に属しているのである。」

疥癬から思いがけず、〈芸術と教養〉へ移る。ドイツ劇場が「郵便局」と「永遠にアーメン」の二作品を上演している。「タゴールを見た後のヴェルトガンス、その差異は大きかったものの、意味深長な思考の流れとは対照的に、写実文学の模範となり、舞台に移された抒情詩となった、と言えるかもしれない。」これは模倣不可能と言えるかもしれない。当ウッジにおけるドイツ語は通常のドイツ語との差異は大きく、学校や当地で教えられるドイツ

語の模範となっている。この新聞に書かれているような訳のわからないドイツ語とは対照的に、いつそポーランド語を話した方がよいのではなからうか。ところで、「ヴィルトガンスの作品の内容はごく短く、魅力的な対話に限られて」いるが、これはお互いに結構なことだ。ポーランド劇場で上演されたフランスの作品についてのレポートがある。「上演はあらゆる点で成功していた。これ以上の出来はなかった、と安んじて言えよう。」安んじて言えよう、という部分なんです、あなたはこうして、安んずることなく言っではいけないのでしょうかねえ。そうすれば、気分もいいし、決して不名誉なことじゃあない。これ以上の出来はなかった、というのはいやほや少し不愉快です。だが、しかたがない。広告の世界のことなのだ。「尿酸の犠牲者」！ そら来た。すぐに感づいていた。そんなことができるのは尿酸だけだ。ずっと前から私は尿酸の敵対者だ。折をみて「ワルシヤワの開発者」に問い合わせよう。この制癌剤ゲドゥロールの記事はもう読んだ。頭脳労働者に対する二〇万ズウォティも読んだ。どうしたことだろう。私はもうこれ以上新聞を読めない。

テープルの向かいで、二人の男性が話し合っている。「ウツジじゃあ、人気があるのは大きなサイズばかりで、それ以外は全て値打ちがないのさ。」何のことだろう。外套のことだろうか、商店か、人間か。彼らはいわくありげにひそひそと話して、今度は、私に背中を向ける。どうしてウツジでは大きなサイズばかりに人気があるのだろうか、分らない。なぜだろう。ウツジには得体の知れないところがある。

長いベトリカウ通りを行く婦人たちは、長靴下の上のほうまで泥をはねている。ギムナジウムの帽子をかぶった小生意気な少年たちが手をポケットに突っ込んで、三人、四人とぶらついている。青い外套を着た十二、三歳の少

女が、かじかんだ手をポケットに入れて、ぬれた地面を見ている。青い帽子を目深にかぶったその額には、一房の褐色の髪がかかっている。そうして、悲しそうに頭をたれて、人ごみの中をぶらぶら歩いているのだが、その顔には若さがみなぎっている。彼女は自分が男の子なのか女の子なのか、分かっていないのだ。年配の男性たちが向かいからやってくる女性たちに視線を向けている。女性たちがびっくりするような化粧をして、口元か顎のあたりに付け黒子をつけているのだ。そして、胴とお尻のまわりがはちきれそうになった黒い外套のボタン穴には、真っ赤なバラを挿している。その大きく、みだらな、豊かな花は、黒い布の上で瀕死の状態で、断末魔の苦しみに痙攣し、息絶えようとしている。ぬれたひどい道路を見ていると、何かワルシヤワのことを、ホテルとそこを通り過ぎていった葬列のことを思い起こすように私に迫るものがある。そして、思い起こしていると、さつそく音楽が聞こえてくる。ラッパだ、ラッパの音が近づいてくる。白い法衣を着た人が黒い十字架を持っている。その後ろに弔旗。その後ろに三人の葬送者、紫のリボンをかけた大きな花輪。そして、ラッパ手たち。彼らが、重々しく、心をこめて吹いているのだ。一步、一步と進んでゆく。一音一音、葬列は歩を合わせるように進み、墓へ向かってゆく。銃を肩にかけた警官の一团が後に続く。通りの喧騒のなか、今度は小さな声が歌う。聖書を手にした聖職者がただ一人で歌っている。路面電車は停止している。聖職者は歩きながら、歌っている。死者を乗せた馬車がゆく。送られて行くのは、黒服に身を包まれた女性だ。嘆く人々。雑談する警察幹部の一团。

とあるホテルのロビーに入ると、デスクの向こうにドアマンの帽子をかぶった男が立っている。酒に酔っていて顔は赤く、明らかに痴れ者だ。ドイツ語で部屋があるかと尋ねる。男はにやにやしている。フランス語で尋ねても、にやにやしている。アルコールに侵されているのだ。何かポーランド語をしゃべっている。アルコールと痴れ者は避けなければならない。そうして半時間後、私は本物の客室で頬を弛める。ほら、ここに幅の広い鏡と、お

湯の出る水道がついた深い洗面台がある。それから、幅広のベッドがある。ここでは呼び鈴は鳴らさない。廊下で、私は早くもシゲナルランプがあるのに気がついた。ここはザコパネの、あの美しく懐かしい、遥かなザコパネの、窓にカーテンのない、みすばらしい部屋とは違う。そして、私は新しい都市でなにが再び待ち受けているだろうかと思いをはせる。

ナイトテーブルのランプも、点灯はしないけれども、ある。赤い立派なカーテンも、カーテン紐は切れているけれども、ある。身を横たえることができる寝椅子も、侮辱されたといつてきついカウンターをくらうけれども、ある。これは慎重に扱わなければならない。スプリングがなくなり、骨格だけになったポーランド的珍品だ。

あるドイツ人に教えを乞う。当ウツジ市の人口は五十万人です。あら、それは残念だ。多すぎる。ポーランドの都市は多様性のおかげで大きいのだ。それがもつと大きくなると、組織化されて小さくなってしまふ。この都市はドイツ人が建設したという。実際、以前もたくさんの人がドイツ語を話していましたが、今ではポーランド語が優勢になりました。ドイツ人たちは工場主や企業経営者です。自前のドイツ語学校もあり、ギムナジウムや、約三十の認可された小学校において、ドイツ語で授業が行われています。しかし、生徒数は減少しています。というのも、両親たちには毎年、授業でドイツ語が使用されることを希望する旨の個別表明が求められるのです。彼らの宗派はたいがいプロテスタントです。ドイツ人著作家協会はカトヴィッツにあります。ドイツ人は劇場を持っています。ええ、もう知っています。そして、上演については、新聞が定期的に批評記事を出しています。知っています、知っています。役者は大部分がオーストリア人で、ドイツ人の役者はなかなか得られません。

では、十万人のドイツ人とポーランド人との関係はどうですか。ええ、良好です。金持ちのドイツ人ほどうまくいっています。それはどうしてですか。金持ちは順応がきわめて速いのです。そうすると、お金がなくなると愛国心が芽生える？ あるいは、聡明さは財布の大きさとともに成長する？ 違います。貧乏人はとにかく苦労します。そして、そのせいで戦闘的になり、妥協できなくなるのです。しかし、金持ちはお金で自信がありますから、外国の素晴らしさも受け入れます。お金と民族意識の問題です。当然のことですが、ドイツ人同士は団体を作って集まっています。三十ほどの団体があります。そして、彼らは二つの政党を結成しています。一つはドイツ市民党で、これはかなり弱体で、あまり活発ではありません。もう一つはドイツ労働者党で、これは民族主義的特徴を持っていて強い連帯感があります。これを聞いて、私は、選挙のときはどうなのか、例えばドイツ人工場主たちは誰に投票するのか、と意地悪く質問をして、予期したとおりの答えを得る。工場主たちはドイツ人に投票せずに、工場主に投票します。ちなみにこの工場主は落選しました。それでは、労働者たちは？ ええ、労働者たちはP P S、ポーランド社会民主党と共闘します。

ポーランド人は十五万人から二十万人います。ほとんどが労働者です。彼らはたいがいキリスト教社会党とキリスト教民主党に投票します。ここにはカトリックの司教座があります。当市にはカトリック教会が五つ、プロテスタント教会が二つ、それにロシア教会が一つあります。

当市はこれらのドイツ人やポーランド人とともに、ユダヤ人も抱えています、とその人が言う。これはすでに気がついていたことだ。そう、私は駅で数人のユダヤ人を見かけていた。それに、ドイツ語を話して、駅で私の列車がどこから出発するのかを教えてくださいユダヤ人がポーランドにいなければ、私はワルシャワ以外の都市を訪れることができなかつただろう。このユダヤ人がウッジにはなんと十五万から二十万人いる。相当な人数だ。彼らは経



済的にたくましくて、工場主や商人、職人を輩出しています。私には彼らの大多数がひもじい生活をしていると断言できる。だが、これ以上ユダヤ人のことを尋ねるのはやめよう。というのも、その人はプロイセン人で、私は彼のカラーが分かるのだ

おやまあ、ドイツ人とユダヤ人の皆さん方、お揃いなのですね。なんて奇妙な状況だろう。あなた方はどちらも異国民なのだ。権利が十分に認められないなかで、同権だ。なんて奇妙な有り様だろう。ほかの点では、あなた方はそれほど似てはいない。お互いに何か気になるところを見つけたらどうか。ユダヤ人たちはあわてて洗礼を受けなくていいし、ドイツ人たちも<sup>(1)</sup>テイフィリンをつける必要はないのだ。このとき、ペトリカウ通りを渡ると——、デーモンに導かれたかのように——ちょうど書店に行き当たる。ドイツ語の書店だ。いそいそと、心はずむ。飼葉桶を見つけた馬のようだ。書店にはシヨーウインドーが二つある。よくわからないポーランド語の方は放っておいて、左へ二歩行くと、ドイツ語で「血に背く罪」。これなら読める。翻訳の必要がない。ああ、また故郷を見つけた。ご機嫌よう。母国語の響きはなんと快く喜びにあふれていることか。「血に背く罪」、これはずいぶんたくさん並んでいる。混じり物のない、生粋のドイツ語。マイヤー百科事典。レース編みと手芸の本、「土曜日に、婦人会が驚きの大バザーを開催する」。福音書。福音書がたくさんある。そうだ、このドイツ人はプロテスタントだ。ルターの聖書だろう。しかし、なぜこんなにたくさんの福音書が並んでいるのだろう。新しい翻訳だろうか。なぜ磔刑に処せられた人についての本がここで宣伝されているのだろうか。この人のことを思う時、私は瞑目しないではおれない。きわだつて分厚い本だ。なにしろ古くからの四福音書はそれほど分厚くはない。注解が付いているのだろうか。と、その時、カバーにハーケンクロイツが付いているのが眼に入る。そして、その上にはあるドイツ民族主義の扇動者の名がある。彼の福音書だ！ 彼の！ そうか、それは結構なことだ。ようやく

分かった。今やシヨーウインドーのなかには秩序が入り込んでいるというわけだ。彼は、<sup>(6)</sup>ヴォータンが真の神だということ、あるいは、キリストがメクレンブルクの出身だということを証明したのだろう。そうだ、それでこの本はこんなに分厚くなったのだ。もつと薄くすることもできただろうに。それでもきつと、人々は信じるだろう。親愛なる故郷よ、ほんとうにご機嫌よう。ドイツ人とユダヤ人のおかしな関係はどうなっているのだろう。彼らはいくらかは歩調をそろえることができるだろう。しかし、私はドイツ人がティフィリンをつけることはありえないことだと思う。

昔のことを聞くのは楽しい。十二世紀にドイツの敬虔な宣教師たちがやってきて、ケルン市の出身者たちがこの修道院に定住した。十四世紀にブワティスワフ・フォン・レンチツア侯という人がクヤヴィ司教にウツザ村を与え、司教はドイツ移民を呼び寄せた。盛衰が繰り返された。十八世紀中ごろ、人口は二百人に満たず、世紀末には男性八十九名、女性九十名と十一名のユダヤ人がこの地に住んでいた。(ユダヤ人が男性か女性かを確かめることはできない。かつて古代ローマ時代において、奴隷に性別はなかった。) 家屋は四十四戸で、加えて四十四の納屋と十八の空き地があった。人間やユダヤ人とともに、馬十八頭、雄牛九十七頭、牝牛五十八頭、豚六十三頭がいた。そうして、ウッジは当初、プロイセン領に、その後ロシア領になった。そして、あらゆるものを荒廃させる呪わしいロシア人の下で、一八二〇年ごろ、ひとつの命令が発せられ、二百の建設用地を持つ工場共同体が設立された。この三十年の間に、人口は二百人から八百人に、煙突は四十四本から百十八本になっていた。それにしても、この八条項よりなる一八二〇年のロシアの政令は異例だった。それは外国人をひきつけた。というのも、一つの条項が、ウッジにおける外国の製造業者や織物職人が享受すべき特典を定めていたのだ。織物職人、紡績工はこの時、西欧文化の代表者たちだった。だが、その文化というのは根本から変質してしまい、人々は金儲けを生活の中

心に置くことに慣れてしまつていたのだつた。教会も建てられたが、なによりも工場が建てられた。ケルンの人たちがやつてきたとしても、修道院に住まなかつたことは確かだ。古くからの認識や憧憬、知識の源泉は輝きを失つてしまい、その後には征服、所有、国家勢力の拡大が残つていた。「なんと美しく、おお人間よ、汝は棕櫚の小枝をかざして、世紀の末に立つていたことか。気高く誇らかな雄々しさと、開かれた感性をもつて。」とはいへ、それは東方にいる外国人にとつてはすばらしい時代だつた。背景には、職務上の成果にたいして感謝した人々がつつた共同の措置があつた。一八二〇年にはこの共同歩調は記録されていない。ところで、この特別措置はすべての「外国人」を対象としていた。「しかし、ユダヤ人には、新しい産業地域への居住は許されていない。また、将来においていかなるユダヤ人にも、本市において居酒屋経営やアルコール飲料の製造は許されてはならない。」ユダヤ人は外国人ではなく、住民でもない。それでは、何なのか。この奇妙な民族はいたるところでこのような特別待遇を受けている。まさに選ばれた民族だ。彼らの隣人はこの民族を、趣味良く愛情をこめて、「南京虫ども」という別名で呼んでいる。

アウグスト・ゼンガーという染色の親方は、その名が示すように愛国的ポーランド人だつたが、この人が旧市街を整備し、最初の染色工場を設立した。ザクセン人やドイツ系ポヘミア人たちにより綿糸工業が興された。ツイッタウ出身のルイ・ガイアーという男が最初の大綿糸紡績工場を建設した。それから、プロテスタント教会と市役所が建設された。ウッジの人口はすでに一八二九年に四千人で、家屋が四百戸あつたが、その十年後には、人口は二万人になり、ポーランド王国第二の大都市だつた。

やがて、この数はカール・シャイブラーの周辺で増加していった。彼は一八万ルーブルを持参して、巨大な工場を建設した。この西から来た男は大攻勢をかけたのだ。一八六四年には、ウッジの人口はすでに三万八千人になつ

ている。内訳は、正教徒が七千人、カトリック教徒が約一万二千人、ルター派が一万三千人、ユダヤ人が六千人だ。「われら、神授の全ロシア皇帝にして君主アレクサンダー二世、ポーランド王、フィンランド大公」は、今般ワルシヤワ・ウィーン鉄道とウッジ間の連絡鉄道建設を決定し、これを下命した。鉄道建設はこれを銀行家ヨハン・ブロッホ、エドゥアルト・フランケンシュタイン、ヨゼフ・ザブルコフスキ、アウグスト・ラファン、カール・シャイプラー、マティアス・ローゼン、モリーツ・マムロットに委託した。彼らの多くはドイツ人と南京虫だったようだ。

鉄道が開通したとき、待望の日を歓迎してウッジのある新聞はこう記している。「我が市がこれほどの祝祭的雰囲気につつまれたことは、かつてなかった。車両を降りると、ベルク伯爵総督閣下は、塩とパンを持った市民代表団から歓迎を受けた。」この時、ドイツ人たちがポーランドで従ったのは、ロシアの流儀だ。しかし、群衆が雑踏するなかで一つの国を主張しても始まらない。夕べには、全市にイルミネーションが点された。いたるところで、入念に仕上げられた皇帝陛下の花押のすかし絵がみられた。それに先立ち、総督はウッジに配置された竜騎兵を閲兵した。彼らはシベリアで召集された者たちで、唯一のロシア人たちだった。

当地での宴会の席で、総督は次のような言葉をたまわった。「ウッジ市の繁栄はドイツ産業、ドイツ人の進取の精神、そしてドイツ的勤勉のお陰である。もし、子がこれらの住民に、祖先の徳に忠実に倣うよう、そして、ドイツ的性格を保持し続けるように激励するならば、彼らにとって良き忠告をすることになると、予は信じる。ポーランド王国内のそれぞれの民族に、それぞれに相応しいものを与えることこそ、いと慈悲深きわれらが君主の思召しである。」

私はヴィルノとワルシヤワで、「ポーランド語を話すことを禁ず」という昔のロシアの張り紙を見たことがあつ

た。言語はどうやら、いと慈悲深く認可される民族性のなかには含まれないようだ。まさにポーランド語だからだめなのだ、と私は思う。そこに見られるのは、ポーランド民族に対する異常なまでの高評価とその特殊な地位だ。この高評価はさらに高まり、生命もポーランド人の民族性のなかには含まれない、という見解にまで達することがある。そうになると、ポーランド人は殴り殺されることになる。この蛮行は一八六三年とその後においてだんだんと行なわれるようになった。ただ、自然とはそうしたものだ、しばらく後に予期しないことが起こった。皇帝が政府もろとも倒れてしまい、ポーランド民族は誰はわかることなく、悠々と、通常の人間としてのあらゆる特性を示すことができるようになったのだ、—— 飢えたる者の恐ろしい食欲と、消化不良と下痢を引き起こす無慮とともに。

ところが、ドイツ人たちはウツジの祝祭において、ドイツ語による授業を行うドイツ人学校開設の認可を受けたのだ。[皆さん、この賢明なる決定がもつ深い意義をよく理解しなければなりません。そして、皆さんがそこに第二の故郷を見いだした偉大なる国家のために、皆さんの産業活動を強化しなければなりません。]ポーランド人たちは怒りで腹が煮えくり返ったことだろう。この腹立ちのために、ドイツ人たちもまた、まったく快適だったというわけではなかっただろう。時には恩恵を施しつつも、高官たちは老獪だった。その後まもなくして、アスファルト歩道が導入され、ガス灯が点るようになった。イスラエル・ボズナンスキとかいう人物が慈善を施して人目を引いた。こうして、八〇年代はもう目前だった。石造建築が古い木造家屋に取って代わった。当市は十五万人が住む紛れもない大都会になった。しかし、電話が敷設されたときには、ウツジの人々はまだ不安があった。電話をかけるという怪しげな習慣はすぐには根づかなかった。すでに当時においても、同時代の人々が、粗末な家と豪華建築の並存、市の中心に長く放置されたままの焼け跡の廢墟、民族や宗教といったこの都市の矛盾について報告し

ている。

ドイツ人とポーランド人相互の憎悪には驚くべきものがある。これらの民族は東西から複雑に入り組んでいるのだ。この国にはポーランド人が定住していたが、その後、彼ら自身がより高い文化を持つドイツ人を呼び寄せる。文化的、経済的發展をとげ、精神的同化が進むが、これは民族的危機を意味する。彼らは、双方ともに元のままでいることはなく、互いに順応してゆくが、国の中枢を占めているのはこれを受け入れることができず、憎悪と、いわゆる伝統を維持することしか眼中にない偏狭な集団だ。すでに十六世紀には、「世界がひっくり返っても、ドイツ人がポーランド人の友人になることはない」という馬鹿げた諺が流布している。ポーランド貴族に呼び寄せられたドイツ騎士団が、タンネンベルクにおいて打倒される。ポーランドの聖職者たちはポーランド語のために奮闘し、ドイツ的要素はポーランド化される。そして、より高い文化を持ったドイツ人たちは周囲を取り巻く農民や貴族たちの言語を受け入れる。しかし、ポーランドはその後自滅し、外国の王家がこの民族を隷属させる。その一つがプロイセンだ。一八四八年、この憎悪が一度だけ中斷される。ベルリンでミエロスワフスキが黒赤金の三色旗を振りかざすのだ。政治的拘留者たちはモアビートの刑務所から解放されていた。彼らは王宮広場を行進し、喧騒のただ中、シユヴェーリン伯が、国王陛下は、ポーランド人が今後、プロイセン及びその王家と連帯するであろうことを固く信じている、宣言する。このポーランド人指導者は大学で熱烈な演説を行い、ロシアに対抗するポーランド・プロイセン同盟を口にする。「自由なドイツを保障するために、アジアに対する防壁として、独立したポーランドが建設されなければならない。」「幾世代を通じて自由を渴望してきた民族の巨人の胸は、今日、その大いなる活動が束縛され妨げられるならば、破壊的に脈打つのだ。」この日の朝、一八四八年三月二〇日のこと、ポーゼン

でポーランドの旗が翻る。ベルリンのポーランド人たちが到着すると、ポーランド人とプロイセン人は帽章を交換する。だが、この憎悪の中断は早くも終わりを迎える。地方は混乱の極にあり、武装した幾つもの群れが各地を移動している。プロイセン軍部隊が要塞に結集する。最初、人々は「いだきあおう！ 幾百万の人々よ！」と歌う。その時、パンパン、と銃声があがる。ポーランド人の蜂起に他ならない。そして、いつものように鎮圧される。ドイツは現在、(へ回廊地帯)、ダンツィヒ、オーバーシユレージエンの強いられた条約に大いに苦勞している。きつと、これを甘受することはないだろう。そして、ポーランドは——恐れているにちがいない。国境があつても、これは仕方がないことだ。どうするかを決定するのは人間なのだ。

現代における国家という概念は解きほぐして、陳腐化しなければならぬ。国境自体が専制的権力なのだ。人間は権利と義務の主体となり、諸民族は自決に目覚めて、国家という昔の怪物は存続することは許されぬ。もつと古い、もつと強固な人間の共同体のために、そして新たに育つた共同体のためにも、席を譲らなければならない。現代において、諸民族の生活はとつとくに政治的境界をはみ出している。それにもかかわらず、国家は賞揚され、高慢で、肥大し、今なお存続している——この時代遅れのマンモス、不精なイクチオザウルスを現代の英知は排除しなければならない。

しかし、さらに急を要するのは、個人に、すなわち自己自身に呼び掛けることだ。

国家と呼ばれるものが持つ途方もない権力を目の当たりにする時、私は啞然とするばかりだ。以前は、これらの領土を王家が、彼ら自身のためにそっくり獲得していた。だから、当然のこととして、国家は彼らの拳を、権力を振るつた。個人はそれに対抗することができなかった。現在、諸国家は、現状で間に合わせなければならない王朝

時代の残骸にすぎず、単なる便宜的政治形態にすぎない。それにもかかわらず、我々は国家が特別な意義を持つものと妄想し、その権力を承認し続けているのだ。

このような産物に対抗して、人間における真の集団、すなわち個人、自己という真正で分別ある集団に呼び掛けなければならぬ。国家の有益性については誰もが認めるところだ。しかし、その有益性に正当性を付与するものは、生きている自己自身であり、分別ある人間集団とその絆を置いて他にない。個人は悩みつつ生き、そして死んでゆく。そこには個人とその世界が存在する。しかし、抽象的概念の背後に潜む大衆、組織、集団は、昔の暴君たちから借り受けたいかめしい匿名性のなかに引きこもったまま、個人を取るに足りない、無価値なものに貶めるのだ。個人は私的人間として露命をつなぐ。彼は降格され、下僕となり、王朝は存続しているように見えるだけだ。公衆が玉座につき、実体をもった人間は単なる影にまで切り詰められてしまった。そもそも国家の理論家たちは個人の実在性そのものを否定するつもりでいるのだ。しかも、信仰という母的世界事象にたいする人間の秘かな関係は、実際のところ、陰に陽にろくでもないもの、つまり私的事柄とされている。たしかにそれは私的事柄だとしても、抽象的な王朝の言うところとは異なっている。つまり、それは個としての人間に向けられた、偉大なる世界事象の直接的表現であり、これによって彼の実在性が認められ、また責任も課されるのだ。

有益にせよ無益にせよ、国家はもう誰の手にも負えなくなってしまった。もう誰も、国家を心から理解することはない。故郷への思慕、家族への愛情、友情、部族への愛——国家はこれらすべてを飲み込んでしまい、その跡形さえなくしてしまふ。それはまさに巨大工場だ。また、そうあるべきで、それ以上のものであつてはならない。

この有益というよりもむしろ無益な産物にたいして、なんという畏怖と隷従が養われていることか。そして、その隷従になんと偉大な呼び名が与えられていることか。戦争において、自らの自由のために戦った民族はごくわずか



にすぎなかった。たいていは、理由も分からずに戦争に引き込まれていった。指導者でさえ分からなかった。勇気を持ってその真相を直視しなければならぬ。重要でないものは、重要でないものになければならぬ。

死者慰霊日。激しかったウツジ近郊（ウツジ）の会戦から十周年目の記念日。工場駅から郊外へ一時間走る。訪問相手が駅にはおらず、遮断機のところでお出会う。広い耕地、畑はすき返されている。土壌はローム質で粘土を含んでいる。とある村に到着する。ドイツ人の集落だ。こぢんまりと清潔な家が一行に並んでいる。福音教会。訪問相手の家の近くにある公園を散歩する。その人は大会戦の戦跡を私に見せてくれる。砲台のための盛り土。ここにドイツ人が駐屯したのだ。盛り土は大きな半円状に続いており、灌木が生い茂っている。池が見えてくる。池の中には武器と弾薬類が眠っているという。すさまじい砲撃が行われ、福音教会の塔は倒れてしまった。池のそばにくぼ地があり、広くベルト状に続き、そこから若木が伸び出ている。これは塹壕だ。今では人間たちがおおいかぶさることもなく、森におおわれている。ここに住むドイツ人農民たちは自分たちの言葉と流儀を守り続けている。偶然手にしたポーランドのドイツ人の詩がどれほどの真実を物語っているのか、私には分からない。

私は称える、子供たちの国を。

父たちは生き、そして死んだ、

父たちに私たちの労働は無益だ、

かなたは永遠の夜に包まれている、

だが、私たちの前には夜が赤々と明け初める。

国土はやがて日の光に包まれるだろう、

そこに新しい国家と民が生まれるだろう。

私たちドイツ人はこの国の光と雨だ、

国の栄養、国の祝福だ。

ゆえに、いざ、耕せ！ 子供たちの国を！

新しいドイツ世界を創るため。

——今日の国家概念とはくだらないものだ。

街路には霧がかかっている。ペトリカウ通りで私は不意に——日暮れが近づき、あちこちの商店で明かりが点っている。両側の歩道はぞろぞろと大変な人波だ——不意に、ワルシャワのマルシャル通りにいるような気がして、懐かしく思い出す。ここを歩くのはとても気持ちがいい。とても親近感があるし、おまけに、この人込みの中を歩くのは刺激的だ。帽子を目深にかぶり、頭部を両肩の間にうずめて、毛皮のコートにくるまった女性たち。ぶらぶら揺れる大きなイヤリングをつけ、重々しいオーバーシューズをはいて、目許が黒い、異様な外見をしたやせた娘たち。顔の盛装が始まっている。背の高い男たち。新聞の呼び売りをする少年たち。黒い上着のユダヤ人たちが三々五々、大声で話しながら先を急いで行く。日に焼けたのっぼの兵士たち。市街電車の方に挨拶している。

コンサートのポスター。ラビアのポスターは緑色で、シマノフスキのは赤だ。

霧がでて午後遅いのだが、この通りを果てまで探索しようと思う。素敵な通りだ。十分歩くと、郊外のようになり、団地のアパートや小屋のような小さな住宅、宿营地が雑然と並んでいる。この通りを歩いていると、時おり、ドロホビチの電柱通りが思い出される。技術産業という西欧世界の精神はこちらにまで浸透しているのだが、この界限を歩いていると、まるで異なる時代に、クラクフでマリア教会やフランシスコ教会に足を踏み入れているような感じがする。太ったポーランド人労働者たちがのろりと歩いてゆく。泥で汚れた長靴、高い帽子、垂れた口髭。ぷかぷかとかくわえタバコを吹かしているポーランド人が二人いる。褐色の外套をベルトで締めて、カツカツと重いステッキの音を立てながら、二人はもったいぶって歩道を歩いて行く。まことに旦那面をしている。尊大で、怒りっぽい旦那の顔だ。

あつという間に、商業地区を抜けて、赤煉瓦の工業地区に入り込んでしまった。柵囲い。煙突。とある狭い横道に入ってみた。大きな門が開いていて、モーターがブンブン、ビュンビュンうなっている。優雅なオープン式馬車がゴムの車輪を付けて、泥道を静かに走ってゆく。褐色の馬に引かれて、御者台にお仕着せを着た召使たちが座わり、その後ろでは一人の紳士が膝に手をのせている。旦那通りは道幅があり、まだ《旦那通り》<sup>ヘレンシュトラッセ</sup>とドイツ語で書かれた標識が残っている。通りの真ん中をレールが走り、空を電線が横切っている。あらゆるものがちゃんと手入れされないままに荒廃している。新しい煙突、新しい通りは荒れたままで、舗石も雑に敷かれている。たくさんの柵や塀を通り過ぎた後、突然、建物が密集した街区が現れる。その一角で少年たちが夕刊を呼び売りし、道路清掃夫が二人、目の粗い柴ぼうきをもつてせっせと仕事をしている。だが、市街電車が曲がってゆく右手には、労働者、工場、煙の上る通りがさらに延びている。ダンツイヒ通り。労働者。煙突と煙。赤煉瓦の壁。柵。建物前面が

ぼろぼろの住居の群。ものすごい高圧線が角の柱から通りの上を横切っている。大通り風のコシチュエーシユコ並木通り。その南の方には赤煉瓦のうす汚れた工場があつて、ぬかるんでいる。北の方には近代的住居や、粗造りの団地アパート。すっかり暗くなつてしまつた。泥のついた長靴に、はねのついたズボン姿でペトリカウ通りを歩く。不意に、華やかな人々の群には心を動かされなくなつてしまつた。

朝、さらに北の方へ足を伸ばす。霧の中を市街電車が明かりをつけて走っている。ペトリカウ通りは歩道も車道も混雑している。ここは商売の場なのだ。側溝を黄濁した水が流れ、冷氣の中で湯気をあげている。歩きながら新聞に目を通す。「間近にせまつた祭日のお付き合ひのために、必要となるあらゆる商品を、しかるべき時に、最高の品質と適度な価格で調えられることを保証してくれる供給元を、誰もが早目に見つけておく必要があります。当地の新聞雑誌に載る誇大な広告に対して。」人々はもうクリスマスのことを考えている。驚きだ。

レイモントがノーベル賞を受賞した。だが、それが何の役に立つのだらう。誰がポーランド語を理解するのだらう。多くの言語が存在するということは、ひどくばかげたことだ。思いつきだが、もしすべての国が、自国の言語とともに二つ目の言語として、英語とかエスペラント語、あるいは何でもいいが、同一の言語を教えることに合意がなされるならば、進歩と言えるのではないか。すべての国で、一つは任意の言語でよいが、第二言語は同じ言語を教えるのだ。これなら、郵便会議とか鉄道会議と同様に、教育会議で簡単な取り決めでことたりる。そうすれば、ついに世界中が同じレールの上を走ることになるだらう。

この通りには圧倒的にユダヤ人が多い。北に行けば行くほど、多くなる。山高の皮の帽子に黒い皮の外套を着た人たち。濃い鬚を長く生やし、黒い帽子をかぶつた人たち。長靴をはいて、手をポケットに入れ、額にはしわが寄っている。ワルシャワでそうだったように、彼らは奥深い中庭から群がり出てくる。裏通りは非常ににぎやか

だ。ハイヒールの若い女性たちがやってくる。外套が肩とお尻のところではちきれそうだ。背が曲がり、はれぼつたい意地の悪そうな顔をした老人が、ぶつぶつ言いながら通り過ぎてゆく。赤や黄、青の織物、リンネルの包み、キャラコが荷車で運ばれ、あるいは一つずつ担がれてゆく。へ新リング広場へ、円形の広い、みすばらしい広場だ。左手に旧市役所、右手にはきれいな色の建物があり、足場が組まれている。新市役所だ。旧市街、狭い通り、ぼろぼろの小さな建物。あるひどい建物に入ってみる。中庭を通って扉を抜けると、別の通りに出る。子供たちがいっぱいいる。通りは波打ちながら下り坂になっている。ガチョウ肉店がたくさんある。小さなシナゴークが開いている。入り口の間に人々が集って、祈っている。なぜ中へ入らないのだろうか。一人の女性が泣き叫んでいるのが聞こえる。男たちの中で何をしようとしているのだろうか。女性は見るも哀れな様子で、みんなに哀願している。入れないわけにはいかない。彼女の三人の子供が重病で、医者がさじを投げたのだ。彼女は中へ入りこんで長老たちのところへ行く。私の案内人が言うには、子供たちのための祈りであるテイリムというダビデの歌の祈祷をしてくれるように頼んでいるのだ。

霧と雪まじりの雨に難儀しながら、さらに露天に歩を進める。プロレタリア地区。建物に張り紙がしてある。「ポーランド人諸君！ ユダヤ人商店で買物をしてはならない！ ポーランド商人たちよ！ 諸君はユダヤ商人より高く売ることができないし、許されることではない。それは諸君の利益であるばかりでなく、民族的義務でもあるのだ。」へ発展委員会がこれに署名している。「ポーランドの商工業を支援せよ！ かくして諸君らは真に祖国の人となるのだ。」

ポーランド語学校で、ポーランドとユダヤの子供を一緒に教えている若い女性が、気さくに次のようなことを話してくれる。「文章を書いたり、筆記試験や手作業ではポーランドの子供たちの方が優れているけれど、話すこと

や理解力にかけてはユダヤの子供たちが優れています。」ユダヤの子供たちの質問は本当に恐ろしい。時としてびっくり仰天させられる。先ごろキリストのことに話が及んだ時に、一人のユダヤの子供が平然と「彼は本当に生きていたの」と質問したのだ。ポーランドの子供たちは驚きのあまり眼をむき、口をぽかんと開けていた。ある時、彼女が授業で、トルコ戦争中に自分の手を焼かせた愛国的英雄的ポーランド人について語り、その人が勇気をもっていったことを説明した。一人のユダヤの子供が考えながら聞いていたが、その後で「そうだね。でも、トルコ人たちも勇気をもっているよ」と述べた。彼らはうんと分析し、正確に、公正に考える。彼らの意見に示唆を与えることは不可能だ。この子たちは家庭でさまざまなことを見聞きしている。そのようなことを授業で教えても、彼らはさも軽蔑するように、「そのことについて僕たちはもうちゃんと家で聞いたよ」というのだ。彼らは意見を述べることにについて、まったく臆することがない。別の人が満足げに口をはさむ。ある学校で彼が教鞭をとっていた時、ロシアの作家に熱を入れたことがあったが、その時、彼はユダヤの生徒たちがにやにやしているのを見た。それが「彼はなんてばかなんだ」という意味であることを、彼ははっきりと理解した。

ユダヤ人の家庭には上等のシラー全集がある。彼らはシラーが好きだ。シラーには情熱が、倫理が、意志があるのだ。

ポーランド人は感情的な面、情の面では、彼らよりはるかに勝っている。

北の方へゆくほど、建物が低くなってくる。市街電車が水溜りの中に止まっている。女性たちは皆シヨールをかけている。案内人が指し示した狭い横丁には、(トイレ通り)というあやしげな名前がついている。ここはウッジ郊外のパウウティという地区で、この長い通りはアレクサンダー通りという。近くの通りで、建物が瓦礫と化しているの見える。ウッジの会戦で破壊されたものだ。とあるみすばらしい横丁では、娼婦、ひも、泥棒がたくさん

住んでいると教えられる。その横丁の舗装はひどく、建物もみじめなものだ。案内人が言うには、売春婦のなかにはユダヤ人もいる——私はすでにポーランドの他の都市でもそのようなユダヤ人を見てきた——、そして、彼女たちのなかには敬虔な娘もいて、ラビを恐れている。犬市場。街角で、警察官が高い石の上に立って指図している。ふたたび砲撃で破壊された建物。このアレクサンダー通りはすっかり鄙びていて、長く果てしなく伸びている。雨がぼたぼた滴り落ちる建物にそって、たくさんの金髪女性がうろついている。

それから、市街電車に乗って、近代的なベトリカウ通りの宿泊先のホテル近くまで帰る。電車は感じのいい大きな花屋のそばで止まる。その前では、三人の脚の長い華奢な子供たちが活力のみなざる珍奇なランを眺めている。それから、鳥肉店の方へ移ってゆく。その店先には、ニワトリとキジの間に、天井で後足を縛り付けられたノロジカが長々とぶら下がっている。三人の子供たちはその開いて乾いた口の中を、不安でたまらないのだが好奇心を抑えることができないで、いやいやながらも覗きこんでいる。

頭の切れる優秀な若い知人が、ポーランドの文芸雑誌からドイツの作品に関するレポートを読み聞かせてくれる。他の作家の作品と並んで、私のものが「昨年のも最も重要な本」だと言う。ねえ君、そのことは勘弁してよ。やれやれ、本だ。来年には別の本が発表されるだろう。世界の胃袋は大きくて、何事においてもそのようにとどまるところを知らないのだ。旅にあつて、私はかなり悲観的な気分になってしまった。本を書くとはどういうことだろうか。だが、孤独であろうとなかろうと、人間には感情が注がなければならないことを、私は心得ている。たとえそれが少数の人間にすぎないとしても、また、何度繰り返しても涸れてしまおうとしても。我々は自己を韜晦す

ることは許されない。世界に、大いなる世界の営みに目的があるのかどうか、私は知らない。だが、それを自分が予感していることは知っている。そうして、私は、途方もない力と接触したあの過ぎ去った数年間のことを思い出す。それを私は一冊の本に閉じ込めて、脇へ押しつけたのだった——、すると、これ以上は何も考えられなくなる。それは私のなかで今なお厳肅に、この上なく厳肅に反響している。

夕方、霧の立つなか、私は彼の奥さんの母親である老婦人を家へ送ってゆく。彼女は別の娘を一人亡くしていた。「とつてもきれいな子でした。」その娘は産褥でなくなり、病弱なその子供は今、彼女の許で暮らしている。「それは大変な苦しみでした。十四年になりますが、いまでも悔やまれます。」「二人は若くて、ほんとうに似合いの夫婦ですわ。純粹な愛情で結ばれておりますの。娘は毎日遠くの学校へ通わなきゃありませんが、彼の方は今では余裕をもって外の仕事ができるようになりました。」

どうしても音楽を聴きたくなり、シマノフスキ(シモ)のコンサートへ行く。このポーランドの作曲家とは以前に話をしたことがある。立派な顔立ちの、上品な人物だ。彼は近代の音楽家については語ろうとはしなかったのだが、それでも、後でいくらか話してくれた。以前はリヒャルト・シュトラウスが彼の偶像だった。ヴァーグナーを聴くと涙を流していたが、今では我慢できない、と彼は言った。私がローエングリンのことを尋ねると、彼は、ええ、あれは特にひどいですね、とうなずいた。彼には文学グループ・スカマンデルに所属する友人がいて、その友人が「ロゲル王」という、三つの文化圏を舞台にしたオペラの台本を書いてくれたと言う。でも、何年も一つの作品に携わっているのはつらい。苦心惨憺たるものです。(文学者や芸術史家は創造の陶醉という言葉を使い、劣った無能な作家はそんなものは存在しないふりをする。だが、それは存在する。ただ、その後には続くのは仕事、苦痛、それから退屈なのだ。) マーラーは、天才的折衷主義者だ。リヒャルト・シュトラウスの後期作品は、空虚だ。新時



代を切り開いたのは、ストラヴィンスキだ、——心理学者でヴァーグナー継承者のシェーンベルクではない。彼はよりによって重要な律動法で無能ぶりをさらけ出している。その後、小さな少女が部屋に入ってきて、恭しくおじぎをしている間も、この若い熱心な話し手は、音楽についての信条を明確に述べた。「重要なのは心理学や表現ではなく、構成と強弱法です。演奏するということは、時間を音で構成的に満たすこと、絶対音楽なのです。時代は新しい擬古典主義に向かいつつあるのです。」彼は続けざまにタバコを吸い、誠実に、控え目に、そして生き生きと語った。

フィルハーモニックホールは街路灯がまばらな通りにある。彼の妹が歌を歌う。私には歌詞が分からないが、最後の方の歌はアラビア風のテーマだ。彼はわずかに足を引きずるようにして指揮台上上がる。燕尾服を着て、堂々たるもので、だいぶ眉根が寄っている。妹はグランドピアノの脇に立っている。背が高く、ほっそりしていて、赤みがかった光沢のある豊かな髪をしており、あらわな左腕を兄の椅子の背において、頭を反らせている。深く朗々と歌う時には、さらに反らせている。くるぶしまである黒いドレスを着て、カラフルな水玉模様のスカーフを首に巻いている。無調音楽が彼のピアノと彼女ののどから流れてくる。憧れに満ちたソステヌート。調性音楽ではこのようには語れない、まさにそのように語るのだ。時間が構成的に満たされているばかりではない。そこには、当人がそれを意識しているかどうかは別にして、確かに構成する人間がいるのだ。この女性の声はなんと情熱的によみがえることができるのだろうか。なんとという女性らしい声だろう。この声の背後には何があるのだろうか、この人はどんな体験をしてきたのだろうか。アッラーの歌のゆっくりした、呼びかけるような流れ。機知に富んだ、おどけた戯れ。この新しい音楽には捉えがたいもの、悠遠なものがある。先日、霧雨の降るなかを送っていったあの老婦人はこの音楽が好きではないだろう。だが、私は気に入る。興奮させられる。半ば閉じられた眼からは熱烈な眼差

しがのぞいているのだ。昔ながらの音楽家たちは「調性」と和声法則のなかで、にっちもさっちも行かなくなってしまうていたのだ。

客席の、お下げ髪に大きな緑色のリボンをつけた少女たちの顔は上気している。タキシードを着た紳士たちは婦人の手に口付けし、年配の男女は家族と座っている。若者たちはグループになってあちこちでご機嫌伺いをしてる。

ここウッジはポーランド西部の地方都市で、工業都市だ。

産業について。大工場だけでなく、ドイツ人が経営する古い手織物工場もまだあるという。そのような工場をアレクサンダー通りに訪ねる。玄関ドアをたたいて、ドイツ語で話すと、根掘り葉掘り聞いてから、快く案内してくれる。私はみすばらしい、小さな工房に通されるものと思っていた。家内労働をイメージしていたのだが、後屋に労働者たちが働くちゃんとした小さな工場がある。親方はれっきとした事業家だ。彼は五百人の会員を擁する彼らのドイツ人手工業者組合について話してくれる。彼らが時代遅れのものを作っていると思つてはいけないという。織物がどんなに大がかりに機械化されても、手織りは無用の長物に墮してはいない。何でも機械でできるわけではないのだ。彼の父親がウッジに来たころは、まだドイツ語しか使われていなかった。ポーランド語が見る見る広がってゆくのは、おかしなものだ、と彼は言う。天井の低い、カタンカタン、ゴトンゴトン音のする屋内を彼と行く。手織り機、緒巻、杼口。ずいぶん原始的に見えるものがいくつもある。たとえば、重りとして石が結わえつけられているのだ。労働者たちは織機の枠の前に立ち、テープルクロスや敷布を作っている。糸巻きが回転する。「経糸」と「緯糸」が動き、布が千巻に巻き取られてゆく。一人の娘が巻き取り機の前に立って、手を伸ばしては導き、整え、左脚で踏んでいる光景を、私は忘れることはないだろう。彼女はまったく同じ間隔で踏んで、踏ん

で、踏み続けている。しばらく観察してから、彼女にどのくらい踏んでいるのか質問すると、毎日八時間から九時間だという。彼女はドイツ人で、十八歳だ。そのようにして彼女が八時間も踏んでいられることが、私には可能とは思えない。何ヶ月も前からだという。だが、娘は笑い、親方も一緒に笑って、できますよ、と言う。それで、私にはできると分かり、そのように信じる。しかし、なんとも落ち着かない。一人の労働者と雑談していて、—— やつと通訳なしで話せるので、私はうれしかったのだ—— 彼が非常な大声で不景気な時勢や給料について話したので、経営者の親方が押し黙ってしまう。階下へ下りる。そして、冷やかな別れの挨拶。もう一度彼の仕事場へ上がって見たかった。そこは暖かくて、清潔で、明るい色のカーテンがかかり、たくさんの花や絵があつて、ドイツ的で居心地がよかつた。

ヴィツェフにある大織物工場。市の中心にある近代的なオフィスビルが私を迎えてくれる。そこで、一つの完全なシステムをもった工場群が郊外にあることを教えられる。織物工場、紡績工場——すべて最大規模で、最新設備を持つている——、捺染工場、染色工場、漂白工場、仕上げ加工工場、倉庫、機械修理工場、鋼鋳物工場、発電所、機関室。長時間、市街電車に乗る。とある大広場を通りすぎる。労働者が大きなデモを行う場所だ。朝のこの時刻になつても、濃い霧が深く立ち込めている。電車の中で小さな学童たちが、私が彼らの言っていることを理解できないので、ひそひそささやいては微笑している。その後、二人の子が小さなお手々で私に握手をして、電車を見送ってくれる。

敷地内には大きな工場の建屋が並んでいる。階段のところでは人々が綿の梱を運んでいる。エジプト綿だ。うつつとした細い繊維が外套にくつついて、私を楽しませてくれる。建屋内には梱の綿を開織する機械装置がある。ローラーが綿をドラムに運ぶと、ドラムが原料をほぐし、スパイクが細分する。さらに新たな打綿機が解きほぐし、夾

雑物を除去する。篩い機によつてほりが取り除かれる。こうして原綿から幅広の巻き綿ができあがる。これを織維の束を引き伸ばし、梳き、解きほぐす梳綿機そめんにかけると、開織されてふつくらした白いスライバー（篠綿）となつて、奇妙にも巨大なソーセージのように円筒状の容器の中に入つてゆく。これらすべてが屋内のいくつもの広いフロアで行われているのだ。多数のスライバーはローラーによつて厚みのある精製綿に圧縮され、引き伸ばされて、織維が平行化される。これがダブリングだ。このようにして一本の良質のスライバーが作られる。粗紡工程。粗紡機は粗糸が締まるように回転軸のまわりを回転させる。それから、粗糸はボビンの周りを走るのだが、フライヤーを通つて、粗糸に撚りが加えられてゆく様はなかなかの見物だ。粗紡機は百二十基くらいまでボビンを搭載している。だが、これも自動紡績機が設置されたいくつものフロアの光景と比べると色あせてしまう。原料織維から粗糸が引き出され、らせん状に撚り合わされ、引き伸ばされて、糸が作られる。そこでは傾斜した多数のボビンが取り付けられたボビン・ワゴンがレールの上を行き来している。練糸機がある。スピンドルが回転し、その先から糸がボビンスタンドにすべりおりてゆく。

なんと巧緻な発明だろう。最初にスタンドヒルのジェームズ・ハーグリーブスという貧しい織工がジェニー紡績機ジェニーを發明した。この男はノッティンガムで死んだ、——矯正施設の中で。その後、リチャード・アークライトリチャードという男が紡績機に改良を加えて、英貨で三百万ポンドを儲けた。さらに紡績機を改良したサムエル・クロンプトンサムエルはわずかな年金をもらつて死んでいった。こうして、この産業は発展してきた。国家は政治が生み出す活力によつてのみ存続しうる、という格言が政治の世界にはある。してみると、産業は天才と悪意によつて存続しうるのだ。

織物工場では糸を加工している。十二万基のボビンが稼動している。宏大なフロアにはほとんど人影がなく、びかびかに磨き上げられている。長い伝動ベルトが中央部にあり、ビュービューと風が吹く並木道さながらだ。いた

るところで白い管のようなスライバーが円筒形の容器からたち上がっている。構内は汽笛音や轟音で振動し、車輪に乗った台車が滑るように移動し、糸が音もなく長く伸びてゆく。この工場には三千台の織機がある。射撃のような騒音と衝撃音。スライバーがゆつくりと引き出されている。糸束、ぴくつと痙攣するような動き、(緯糸)だ。階段のところまで来ると、すっかり耳が聳されて、次の構内に入る気になるまでには、数分待たなければならなかった。この建屋では湯気があがっている。巨大な水作業場だ。労働者たちが裸足で歩きまわったり、梁の上に座っている。水洗い、煮沸が行われている。ひも状の繊維がいたるところで引き伸ばされ、ローラーで圧縮されている。亜麻の繊維が乾燥され、打って柔軟にされ、ローラーにかけて平らにされているのだ。加熱室、ストレッチング室。縮絨、染色、捺染が行なわれている。毛羽焼き機には驚かされる。ガスが一列に燃えていて、その火の中を亜麻布がローラーで引つ張られてゆく。亜麻布は焦げることなく、表面だけがきれいに仕上げられるのだ。四回、火の中を通してしている。しわ取機、梱のスタンプ押し。計測器。染色工場では湯気が立ちこめている。白いスライバーや带状の生地が中へ入ると、緑色になって出てくる。あたりは水と湯気があふれている。捺糸工場、くず糸を使用するくず糸紡績。

これでようやく屋外に出る。発電所をのぞく。中で二、三人の人が働いている。巨大な機械が稼動し、人間がそれらを観察している。石炭が機械的に外から滑り込んでくる。そして、それを石炭車が時おりぶちまけてゆくのだが、ボイラー室の中の灼熱はすさまじいものだ。古いボイラー室が解体されている。鋳物工場、木工所、鍛造所、製材工場。この工場には四〇〇モルゲン(unit)の耕地があり、自ら農業経営も行っている。橋にさしかかる。そこに排水を濾過するためため池が造られているのだ。熱水が戸外にそのまま排出されているのだが、霧と湯気が濃くて、何も見えない。ここには百八十六戸の社宅がある。

西欧の諸民族を大きな不幸が襲った。数世紀前から、彼らの間では昔ながらの感情が廃れ、啓蒙主義、科学、政治、国家がそれにとつて代わりつつある。だが、新しい感情、新しい淨福が再び現れつつあることを誰が否定できるだろうか。我々人間は灼熱しつつ地球に根ざしているのだ。これは遠く離れてみて、ゆつくりと分かってくることだ。だが、多くの人がありありと目にするのは、古いものの解体、兆しはじめた空虚さだけだ。そして、機械、産業、略奪戦争、領土拡張戦争、賃金労働者の群れ、重荷に苦しむ駄獣のような民衆の現実に対して非常に厳しい目を向けている。このような状態がいつまでも続くことはないだろう。この時代は技術の時代に終始することはないだろう。人々はまだ長い間、物質主義に対して批判の声を上げるだろう。そこにあるのは空虚だ。このことははっきりしている。だが、この空虚のなかには未来が予示されているのだ。だから、私はそのようなロマン主義的な叫び声が好きではない。現段階では雑草がはびこり、我々はそれを踏みつぶすことになるだろう。新しい思考が認識となり、感情となるには、機械になるよりもずっと長い時間を要するのだ。

マリア教会、処刑されたイエス、義人ゆえに、私はクラクフを礼賛した。それらは今も生きている。はるかな昔からあるものは常に最も新しいものだ。だが、ここにあるこれらの機械もまた真正で、強靱で、鋼の生命力を持っている。それらを私は支持する。それらのものが、処刑されたイエスや義人とどう関係するのかわかることは、私には問題ではない。

私は、——たとえ、その矛盾の亀裂が地獄にまで達していて、ナンセンスだと言われようと——私は両者を礼賛する。

もう一度、私はほの暗い小路に呼び出される。そこにストリコフのレッベが住んでいるのだ。その人に会って話

をした。

なぜカトリックの聖職者や修道士と会談しないのかというと、私も本当はそうしたいところだ。だが、私はポーランド語ができないので、質問をしても思うところまで到達できない。なのに、この国の人たちは、私が話をして、私の希望を知っていても、ちゃんとした配慮をしてくれないのだ。私が文化的なことに関心を持っているといえ、彼らは美術館のことを考える。私は頬をふくらませる。意欲は十分ある。とはいえ、できもしないのにできるふりをするのはよくでなしだ。

グラ・カルヴァリヤの大レッベは面会を断ったが、このレッベは膝を交えてくれる。彼は貸家に住んでいて、彼の学びの家ベスメドレシユ(シナゴグのこと)は小さい。そこで数人の人が祈り、学んでいる。その後から、丸型のフェルト帽をかぶったレッベが姿を現わす。灰色の鬚をふさふさと生やした大柄な人だ。彼がレッベ・サデイエ、ギヒリンの大レッベの孫だと教えられる。彼はぬれた傘と絹の外套を人に預けて、居室のテーブルの上座に腰を下ろす。話によると、彼はここに住まなければならないのだという。戦争中、彼は近郊の村ストリコフの彼の家を去らなければならなかったのだ。現在、誰かがその家を占拠していて、彼は再びそちらへ移ろうと試みている。ベスメドレシユからきた人たちは漸次テーブルの周りに腰を下ろす。私が質問し、レッベが答えると、彼らも加わって私に説明をしてくれる。その間、レッベは静かに座って、物思いにふけり、時々耳を傾けてはうなずいている。話しによると、彼は安息日遵守のために奮闘しており、特に、工場主と商人への働きかけをめざして外国にも活動を広げている団体の指導的立場にあるという。私は彼に安息日について尋ねる。

いわく、「安息日とその遵守はユダヤ教精神の根本原理なのです。安息日は、ユダヤ人がそれにつかまるようにと、神が投げてくださいった綱なのです。」戦争中、東方ユダヤ人の宗教的倫理的感情が鈍化し、物質的なものへの

執着が強くなった。しかし、その後ユダヤ人の生活は安定した。それで、彼、レッベはユダヤ人の宗教的・道徳的・生活と安息日の遵守のための宣伝活動を自己の課題として引き受けた。彼は企業家たちにずいぶん手を焼いた。彼らは、たとえば、紡績工場の荷造人夫などのユダヤ人労働者を、安息日にも働かせることをやめようとしなかったのだ。一九二二年に、彼は「神聖な安息日を守り維持する協会」を創立した。この団体は実践的な活動をおこない、使者を街頭に送り出している。

質問することは、私にとつて容易ではない。だが、灰色鬚の大柄のレッベが、分かりやすいドイツシユ語で、優しく穏やかに答えてくれるので、私は勇気づけられて、次のように尋ねる。私はたくさんのユダヤ人に会い、たくさんのシナゴークや礼拝所や墓地を訪ねて、いろいろなことを学びました。でも、一つ分からないことがあります。それは、どうして敬虔なユダヤ人たちがレッベによつて分裂しているのか、ということですか。なぜユダヤ人はレッベから離れることができないのでしょうか。ユダヤ教という信仰は一つしかない、と私は西側で聞かされました。彼らはテンプルで優しく微笑んでいる。誰かが、「良い質問だ」と請け合うようにならずにいる。レッベは沈思した後、その非常に穏やかな眼を私に向ける。

「すべての人が同じ神へと通じる目標を持っています。ここに一つの大きな国があつて、一人の王がその国を統治しています。けれども、王一人では国を治めることはできない。兵隊や将軍が必要です。これらがレッベなのです。レッベたちはどこが異なっているのでしょうか。彼らは誰も同じ一つのものを振り所しています。一人一人のレッベは、トーラーを厳格に理解したり、また柔軟に理解するかもしれませんが。トーラーにはいろんな理解の仕方があつてよいのです。ヘミダス・ハデム（私は命じる）というトーラーから、ヘミダス・ホラヒム（私は同情する）というトーラーまであります。これは解釈なのです。ですから、トーラーを厳格に理解する者はそのよう



な信者をもつし、柔軟に理解する者はそのような信者をもちます。そして、それによって信者の数が決まるのです。レッベは敬虔ですし、その父親たちもまた敬虔な人たちです。皆、自分が共感する人をレッベに選んでいるのです。」

同席の人たちが言うには、信者たちはレッベの幕前で、能力と適性を示したレッベの子供か孫に握手を求め、お祝いを述べるのだ。穏やかな素晴らしい言葉が私の内部で反響している間にも、彼らは時に激しく、がやがやと話している。座っている人、周りに立っている人、レッベの二人の息子もいる。一人は顔一面に産毛のような髯を生やし、もう一人はもつと柔らかな髯だ。二人ともよく笑っている。レッベの弟もいて、私に気配りをしてくれて、私の考えを理解しようとしてくれる。「学ぶことは——大変です」と彼は言う。「私はとても兄のように学ばせませんでした。私には向いていなかったのです。」そして、彼は崇敬の念をもって、ささやくような声で兄について語る。「それにその後には、子供たちの教育です。兄は眠る間も惜しみました。それでも、ここにいるのは学者じゃありません。どちらも商人で平凡な人間です。そのように生まれついているのです。」

豊かな鬚をたくわえたレッベは、テーブルの上座で頭を胸に沈め、うずくまるように座っている。彼の眼はくぼんだ、とても穏やかな眼で、外部へは向けられずに、自己の内部にとどまっている。それは彼自身の内部をのぞき込む窓なのだ。彼にはどこにも愁いを帯びて、ひっそりとしたところがあり、鬚の下にあるその顔はやせているように見える。慎重深く、温和で、非常に貧しい。あのグラの裕福なワンマンのレッベとはなんと対照的なのだろう。そして、彼らの間でこうして座っているうちに、私はやがて、この人がほとんど過度とも言えるほどに穏やかで柔和なことに気がつく。無邪気な物静かさが彼には感じられるのだ。新しい質問をしようとして私が口を開くと、彼は体を起こすことなくテーブルを見渡して、「静かに、質問です。」

正統派とシオニズムについてレッベはどのようにお考えですか、と私は質問する。「正統派ユダヤ人はエレッ・イスラエルから離れることはない。シオン(二五)はトーラーと一体です。トーラーなくして、シオニズムはユダヤ民族の運動とはなりません。」彼はシオニストのユダヤ人について、情愛をこめて、自分はシオニストの敵ではない、と語る。しかし、神の前では、ユダヤ人とは民族と国とトーラーを一つに結び合わせた者なのだ。それなくしてはシオンもない。そして、このことをユダヤの民はよく考えなければならぬ。

彼の話の中で、タルムードとトーラーという言葉が繰り返して出てくる。私が西欧のユダヤ人について話すと、彼は、西欧ユダヤ人の多くはタルムードとトーラーから離れてしまった、そのために、彼らの子供たちはユダヤ的教育を受けていないとして、ポーランドを引合いに出す。子供は最初にタルムードとトーラーを学ばなければならぬ。世俗的な教育はその後だ。頭がしっかりしていれば、世俗的教育も身につけることができるものだ。

では、古い聖書は現代科学にたいしてどのような関係にありますか。そもそも両者を結びつけることは可能なのですか。レッベは座ったまま肩をすくめる。彼は天文学が趣味なのだ。そこで、彼は次のような発言をする。

「トーラーはあらゆるものに実りをもたらせる泉です。科学はそこから湧き出る個別的な水にすぎません。科学は泉なくしては持続することができず、泉なくしては涸れてしまう。至上の権力も、無上の精緻な計算も及ばない自然現象があります。あらゆるものを打ち壊すことのできる神の監督があるのです。」

素晴らしい談話、完璧なる甘露。

私は、前に会談の約束をしていたシオニストの宣伝活動家を避ける。最後の出立の準備をしていると、若いイ

ドイツシユ語作家の訪問をうける。もう一度、私はポーランドのホテルの暖かい一室で彼らの一人と向かい合い、彼らの問題をじっくりと一緒に考える。

「戦前には」とソファに座った若者は話す。「私たちの民族の知識人は大半が同化していました。その後、彼らは元に戻り、市民たちはシオニストになり、その他の人たちはポアレ・シオン(二七)に入りました。社会主義者はユダヤ問題を避けました。」私がストリコフのレッベのことを話すと、彼はワルシャワ近郊の村にいる一人のレッベについて語る。この人は四十年前から、食べるものにもこと欠き、涙を流して、寒い思いにたえながら、全世界とその罪のために祈っています。別のレッベは、何年も前から勝手気ままな生活をおくり、食を楽しむ大食漢で、「人生は素晴らしい」と語る楽天主義者です。

さて、それでは現在の君たちの状況はどうなのですか。ビアリツク(三)の名前を聞いたことがありますか。「まあ、党派的な問題です。要するに彼はヘブライ語で書いています。それだけのことです。彼は凡庸で非力な俗物です。ユダヤ人芸術家と、ユダヤ的芸術家があります。これを区別しなければなりません。この区別はすべての民族についていえます。ポーランド人やドイツ人、あるいはユダヤ人が、ポーランド的な、あるいはドイツ的、ユダヤ的な生活を描いたとしても、それだけではまだ民衆画家とはいえません。この国にはたくさんユダヤ人芸術家がいまゝ。彼らはゲットーの絵や歴史的テーマを描いています。それ自体は何の意味もありません。才能を持っていて、その才能に自分を委ねなければなりません。それがすべてです。」この元気のいい男性はパレスチナの問題について、懐疑的に、しかし辛辣に墮することなく語る。そこからは、昨日のレッベとの会話におけると同じ響きが聞こえてくる。「ひよつとすると、人々はそこに国家を建設することに成功するかもしれません。ひよつとすると、多大な犠牲を払って。その場合、人々が達成したものとは何でしょうか。彼らは兵士や政治家や工業労働者を

出さなければなりません。世界はそのような人間をさらにたくさん抱えることになるでしょう。しかし、彼らはスピノザやベルクソンのような人間を育成することはないでしょう。

そこに世界の未来はありません。シオニズムは肉体的運動です。世界は人間的に教化されなければなりません。ユダヤ人のおかれた状態だけが酷いということではありません。ドイツ人も、ポーランド人も、フランス人も、アメリカ人もイギリス人も大変な目にあっています。彼らの文化はどうでしょうか。彼らの文化は私たちに感銘を与えはしません。私たちは戦争でいろんなことを見てきました。あらゆることが人間的に教化されなければならないのです。ゆつくりと。そうすれば、ユダヤ人の直面する大問題も解決されるでしょう。私たちの実体を破壊しなくても。」

自ら語らなくても、そのような声を聞くことができるとは、なんと快いことか。私たちは世界に一人ではないので、は、ということがよく分かる。それは、言葉で表現しがたい、あらゆる感情の中でも選り抜きの感情だ。

原 注

- (1) テイファイリン 旧約聖書の章句を記した羊皮紙を納める革の小箱で、祈る時に革紐で額と二の腕に着用する。聖句箱。  
 (2) 一冊の本 一九二四年発表の長編未来小説「山、海、巨人」のこと。  
 (3) ウクライナウに生まれた、近代ヘブライ語の詩人(一八七三—一九三四)。(ポグロムを扱った長詩「虐殺の都市で」がある。)

説  
注

- (一) ウツジ ワルシャワの西南西二二〇キロに位置するポーランド一の工業都市。十九世紀初頭までは人口千人に満たない村であったが、その後ポーランドにおける繊維産業の中心地として急速に発展した。ウツジとも。
- (二) ヴィエリチカ クラクフ南東一三キロにある人口一万八千人の町。十一世紀から開発が始められた岩塩坑は一九七八年に世界遺産に登録され、現在では観光の名所として国内外の観光客を集めている。
- (三) クニグンデ ポーランド女王。ポーランド名はキングガ。ハンガリー王ペーラ四世の娘で、クラクフ・サンドミエシユ侯ボレスワフ五世童貞王の後。岩塩層の発見にはクニグンデの伝説が結びついている。
- (四) タゴール ロビンドロナト・タクル(一八六一—一九四二)。インド、ベンガルの代表的な詩人。一九一三年にアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞。戯曲に「郵便局」「シヤマ」などがある。
- (五) ヴイルトガンス アントン・ヴイルトガンス(一八八一—一九三三)。オーストリアの詩人、劇作家。「永遠にアーメン」、「カイン」などの作品がある。
- (六) ハーケンクロイツ 鉤十字。ヒトラー率いるナチスの象徴で、一九一九年からナチスの党旗に、一九三五年以降はドイツの国旗にも用いられた。
- (七) ドイツ民族主義の扇動者 ドイツの作家でありナチスの政治家アルトゥール・ディンター(一八七六一—一九四八)のこと。旧約聖書をユダヤ的であるとして拒否し、「我らが主であり救い主イエス・キリストの福音」(一九二三)を書いている。「血に背く罪」は反ユダヤ主義的ベストセラーで、三部作「時代の罪」の第一作。
- (八) ヴォータン 北欧神話における主神。早くからゲルマン諸民族の間で崇拜された。
- (九) なんと美しく… シラーの詩「芸術家」の一節をふまえている。棕櫚の葉は勝利を表わす。
- (一〇) その名が示すように ポーランドには強力王アウグスト二世やポーランド最後の国王スタニスワフ・アスグストなどがいる。
- (一一) カール・シャイブラー 十九世紀のウツジ産業界における大立者の一人で、ヨーロッパの綿織物王といわれた(一八二〇—八二)。
- (一二) イスラエル・ボズナンスキ ポーランド織物産業の大立者で博愛主義者(一八三三—一九〇〇)。
- (一三) ミエロスワフスキ ポーランドの民族解放運動の指導者(一八一四—一七八)。
- (一四) 黒赤金の三色旗 この旗は、一八一三年のナポレオン戦争時の学生義勇軍の軍服に由来するといわれ、自由と統一の象徴として、その後、ドイツの国旗となった。
- (一五) ポーゼン ポーゼンはドイツ語名で、ポーランド語名はボズナン。ポーランド西部の古都で、三月革命時はボズナン大公国としてプロイセンの支配下にあった。
- (一六) いだきあおう!… シラーの詩をもとに作曲したベートーベンの第九交響曲の合唱の一節。

- (一七) 強いられた条約 第一次世界大戦後の一九二二年三月、ポーランド人とドイツ人が混住するオーバーシユレージエン(上部シロンスク)の帰属について住民投票が行なわれ、その六〇パーセントがドイツ側に投票したが、カトウツツエを含む工業都市の大部分がポーランド領となった。また、この住民投票に前後して三度にわたりポーランド側の蜂起が起った。
- (一八) ウッジ近郊の会戦 第一次世界大戦中の一九一四年十一月十一日から十二月五日の間、ドイツ帝国とロシア帝国との間で戦われた会戦。
- (一九) シマノフスキ ポーランドの作曲家(一八八二—一九三七)。主な作品として四つの交響曲の他に、オペラ「ロゲル王」などがある。
- (二〇) ジェニー紡績機 J・ハーグリーブス(？—一七七八)が一七六四年に開発した一人で多くの糸をつむぐことができる紡績機。娘の名前をとって命名した。
- (二一) リチャード・アークライト 一七三二—一九二。
- (二二) サムエル・クロンプトン 一七七九年にミュール紡績機を発明した。(一七五三—一八二七)。
- (二三) モルゲン 昔の耕地面積の単位で、一モルゲンは約三〇アール。
- (二四) 我々人間は… ここに見られる全一性のイメージは、デーブリーンがギムナジウム時代から影響を受けたフリードリヒ・ヘルダーリンの小説「ヒュベリオン」の結語をほうふつさせる。
- (二五) エレツ・イスラエル イスラエルの地。パレスチナ。
- (二六) シオン エルサレムのダビデの居城があったとされる丘。そこからエルサレム全体、さらにエレツ・イスラエル全体をも指す。
- (二七) ポアレ・シオン 二十世紀初頭に創設されたユダヤ人の社会主義政党。一般的な社会主義の目標とともに、ユダヤ人労働者大衆をパレスチナに集結することでユダヤ人労働問題の解決を目指した。

## 訳者あとがき

本訳はアルフレート・デーブリーン著「ポーランド旅行」の第九章にあたる「ウッジ」の翻訳で、「岡山商大論叢」第四十二巻第三号所収の同書「ザコパネ」の章の続きである。

ウッジは一九世紀初頭までは人口千人に満たない村であったが、その後、ポーランドにおける繊維産業の中心地として急速な発展を遂げ、現在はポーランド随一の工業都市である。旅行記によると、デーブリーンが訪れた一九

二四年当時、ウッジの住民は約五十万人で、そのうちの十万人がドイツ人、十五万人から二十万人がユダヤ人だったという。

デーブリーンは、第一次世界大戦におけるドイツとロシアの会戦の傷跡がまだ癒えないウッジの街を訪ね歩きながら、ポーランド人、ユダヤ人、そしてドイツ人相互の共生関係や、繊維産業の発展の歴史等について報告し、また、近代において現われた技術精神の展開とその未来に思いをはせている。この新しい精神は、現状では物質主義、技術時代として現われ、そのネガティブな面に一般の批判の目が向けられているが、このことに対してデーブリーンはこの章の章のモットーにおいて、「(物質主義は)空虚なものだが、そこには未来が予示されている。だから、私は物質主義に対する声高な批判が好きではない」と述べている。この問題は、やはり一九二四年に書かれた彼のエッセー「自然主義時代の精神」において「コペルニクスの精神的結論はまだ出されていない」としてより詳しく扱われている(「自然主義時代の精神」岸本雅之訳、「岡山商大論叢」第三十七卷第一号参照)。その一方で、クラブで出会った処刑されたイエスや義人への思いにも変わりはなく、「はるかな昔からあるものは常に最も新しいものだ」として、紡績工場を見学した後、次のように書いている。

「ここにあるこれらの機械もまた真正で、強靱で、鋼の生命力を持つている。それらを私は支持する。それらのものが、処刑されたイエスや義人とどう関係するのかということ、私には問題ではない。

私は、——たとえ、その矛盾の亀裂が地獄にまで達して、ナンセンスだと言われようと——私は両者を礼賛する。」

古い精神と新しい精神に対するこの矛盾はしかし、性急に確定的なものとして捉えるべきものではないように思える。さしあたりは、未来小説「山、海、巨人」(一九二四)及びエッセー「自然主義時代の精神」において新し

い精神と対峙した後、デーブリンは「ポーランド旅行」において古くからの精神に接して、そこに宗教的感情的な価値を見出した、という経過を確認しておきたい。